OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エマニュエル・レヴィナス現象学におけるセクシュアルな自己変容記述の解明
Author(s)	古怒田, 望人
Citation	年報人間科学. 2020, 41, p. 95-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

エマニュエル・レヴィナス現象学におけるセクシュアルな自己変容記述の解明

古怒田 望人

論文要旨

エマニュエル・レヴィナスは、同時代の現象学者のなかでもとりわけ、その現象学の発端からセクシュアリティを一つの軸としていた。本論は、レヴィナスの主著である『全体性と無限』(1961) におけるセクシュアリティの現象学を「自己変容」という側面から解明し、レヴィナスのセクシュアリティの現象学を、セクシュアリティの文脈で具体的に展開する可能性を提示したい。第一節では、レヴィナスのセクシュアリティの現象学の先行研究の問題点を指摘し、この現象学が「生殖」中心主義とは異なった「セクシュアルな自己変容」としてセクシュアリティを記述しているという展望を示す。第二節では、この「セクシュアルな自己変容」の記述がどのような文脈においてなされたのかを解明するために、30年代のレヴィナスの記述にまで遡り、ナチズムにおける生物学決定論に対するレヴィナスの批判との関連性を示す。第三節では、レヴィナスの「セクシュアルな自己変容」の記述がこの決定論を覆す現象であることを概観しつつ、レヴィナスのセクシュアリティの現象学が「男/女二元論的性差」の二項対立を素朴に措定しているものではないことを示す。最後に、第四節において、そもそもなぜレヴィナスはこのような「セクシュアルな自己変容」の記述を必要としたのか、またそのセクシュアルな自己変容の体験における「曖昧さ＝両義性」から、この現象学の臨床的な意義を提示したい。

キーワード

エマニュエル・レヴィナス、セクシュアリティ、愛撫＝ペッティング、現象学、精神分析

はじめに

エマニュエル・レヴィナス（1905-1995）は、同時代の現象学者のなかでもとりわけ、その現象学の発端からセクシュアリティを一つの軸としていた。実際、ジェラール・ベンスーサンは論文「両義性と二元性――レヴィナスにおけるエロス的なものについて」(2014) の中で40年代の捕虜収容所時代にレヴィナスが記した覚書を中心に、レヴィナス現象学においてセクシュアリティの構造が形を変えつつも、常に意識されていたと論じている。そして、晩年絶えず「性欲なき愛」(ex. Levinas, 1991, 257) という概念を提示し、生殖概念すら放棄しながらも1988年の「他者、ユートピア、正義」において彼が中期まで取り組んでいた「セクシュアリティ」の問題が「開拓すべき展望をいくつも開いている」と吐露している（cf. Levinas, 1991, 258)。彼のこの発言の裏には80年代に生じたHIV感染者予備軍とみなす同性愛者、セックス・

ワーカー差別とミシェル・フーコー（1926-198）の死が関わっていると推察される。なぜなら、1945年の覚書の中で、レヴィナスは「ホモ」を「落ち目」、「病人」と明らかに差別的に形容している（Levinas, 2009, 161）しているが、ユダヤ人と同じように性的マイノリティはナチによって虐殺されたからだ。そして何より、「ユダヤ人」の医師マグヌス・ヒルシュフェルトは性的マイノリティの人権擁護の第一人者であると共に、ナチが政権を奪取した際真っ先に破壊されたのは彼の研究所である。戦後、レヴィナスがこれらの事実を全く知らなかったということはあり得ない。レヴィナスにはクィアな存在へのある種の「負い目」があったからこそ80年代に口を開いたと同時にこれから見ていくような自らのクィアな記述を堂々と示すことができなかったのだと推測される。レヴィナスは、村上靖彦が述べるように「両義性に引き裂かれていた」存在だったのだろう（合田、村上, 2012, 58）。

それゆえ、本論は、一方では、レヴィナスの主著である『全体性と無限』（1961, 以下、TI）におけるセクシュアリティの現象学を「自己変容」という側面から解明し、レヴィナスのセクシュアリティの現象学の文脈をレヴィナスの文献研究から具体化し、他方で、80年代にレヴィナスが「開拓すべき展望」としたセクシュアリティの問題、レヴィナスの残した「課題＝痕跡」を、この文研研究を介して答える。言い換えれば、レヴィナスが語れなかったことを、語りなおす（redire）試みが本論の意図である。

本論は次のように展開する。第一節では、レヴィナスのセクシュアリティの現象学の先行研究の問題点、特に「生殖規範」を問題を指摘し、この現象学が「生殖」中心主義とは異なった「セクシュアルな自己変容」としてもセクシュアリティを記述しているという展望を示す。第二節では、この「セクシュアルな自己変容」の記述がどのような文脈においてなされたのかを解明するために、30年代のレヴィナスの記述にまで遡り、ナチズムにおける有用性概念に基づいた決定論に対するレヴィナスの批判との関連性を示す。第三節では、レヴィナスが「女性化」と呼ぶ「セクシュアルな自己変容」の記述がこの決定論を覆す現象であることを概観しつつ、レヴィナスのセクシュアリティの現象学が「男/女二元論的性差」の二項対立を素朴に措定しているものではないことを示す。最後に、第四節において、そもそもなぜレヴィナスはこのような「セクシュアルな自己変容」の記述を必要としたのか、またそのセクシュアルな自己変容の体験における「曖昧さ＝両義性」から、この現象学の臨床的な意義を提示したい。

第一節　先行研究の問題点と異なった展望

本節ではレヴィナスのセクシュアリティの現象学の先行研究の問題点を、「生殖」という観点を中心として具体的な社会規範の問題として批判する。同時に、文献学的見地から、レヴィナスのセクシュアリティの現象学が必ずしも「生殖」の文脈のみに回収されるわけではないことを示し、本論の目的である「セクシュアルな自己変容」の記述の解明のための展望を示す。

レヴィナスのセクシュアリティの現象学に関する先行研究は、素朴に「男/女二元論的性差」を前提とし、また「生殖」に関する規範を考慮に入れていないために問題がある。

一方で、伊原木大祐は論文「E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題」（2015）のなかで、

レヴィナスのセクシュアリティの現象学を「出産」と切り離して考えることに疑義を示し[1)]、この現象学における「「女性的なもの」の深部に埋もれた子の契機」を強調し、その「子」にこそ「未来」が帰属されると解釈する[2)]。他方、クレール・エリス・カッツは論文From Eros to Maternity（2004）の中でこのような伊原木の議論をより詳細に論じている。カッツはボーヴォワール、イリガライ、デリダ等、レヴィナスのセクシュアリティの現象学への批判に応答しつつ、レヴィナスの「創世記」解釈を基に「男/女の性差」は人間性そのものに常に既に備わっていると主張する[3)]。そして、レヴィナスとフランツ・ローゼンツヴァイク（1886-1929）との関連性から、「男性」の「女性」に対する脆弱性や依存を示すことで男性中心主義を批判する[4)]。さらに中期レヴィナスの「女性なるもの」や後期レヴィナスの「母性」を分析し、特に後期の「母子関係」概念を「死を越えた未来」の一種のイマージュとして捉え、性を倫理の原型として提示する[5)]。確かに、男性中心主義批判としてレヴィナスのセクシュアリティの現象学を読み解くことは――次節で論じるように――レヴィナスのセクシュアリティの現象学の一つの目的でもあるし、伊原木以上に批判的かつラディカルなセクシュアリティへの視点をカッツは与えてくれる。しかし、カッツ自身もフェミニズムの観点から留保しているように[6)]、そもそも「男/女の性差」を前提としたレヴィナスのセクシュアリティの現象学理解は素朴な面があり、カッツ自身が素朴な「セックス二元論」に、ある面で、留まってしまっている。加えて、より重要な問題点は、伊原木、カッツ、両者ともに「生殖」が社会規範の問題ともなることを考慮に入れていない点である。リー・エーデルマンが*No Future*（2004）で指摘するように、シスヘテロ的な生殖規範――「女性＝出産＝生殖主体」――が正当化されるのは「未来」を〈子どもなるもの（the Child)〉という観念に帰属させる前提によってである。言い換えれば、〈子どもなるもの〉＝「未来」というイメージは、その無垢さが人々の庇護を要請するかぎりで「拒絶しがたいものであり」、そのために「未来＝〈子どもなるもの〉」は「政治的なものそれ自体がそのうちで考えられなければならないロジック形作る」もの（Edelman, 2004, 2）なのだ。それゆえ、「子ども」を「死を越えた未来」のイマージュとみなすことは、「クィア」な存在たちを排除する恐れがある。実際、カッツはプラトン哲学を喚起しつつ「男性が子どもを産むとしたら、それは（産婆術のような）概念の抽象化である。」（Katz, 2004, 201, カッコ内は引用者）と述べているが、生殖能力を残したまま性別を女性から男性に移行し出産することのできるトランス「男性」の生殖の可能性を「女性＝出産＝生殖主体」というシスヘテロ的な生殖規範の観点から完全に排除してしまっている。そしてなにより、この〈子どもなるもの〉という観念が、杉田水脈衆議院議員による「彼ら彼女らは（LGBT）は子供を作らない、つまり「生産性」がない」という差別的言説に結びついている（杉田, 2018, 58-59, 丸カッコ内は引用者）。このように現実社会のセクシュアリティの問題に先行研究は応じることができていない。レヴィナスが残したセクシュアリティの問題の「開拓すべき展望」に答えるためには、別の展望が必要となるのではないだろうか。

確かに、これらの研究に「レヴィナス研究」として妥当性がないわけではない。古典的なユダヤ「男/女二元論的性差」をレヴィナスは『困難な自由』（1976）の「ユダヤ教と女性的なもの」（1960）において明記しているし、レヴィナスはセクシュアリティを記述する際にたびたび「繁殖性(fécondité)」という生殖を喚起させる概念を参照している。

しかし、セクシュアリティ概念が生成されたレヴィナスの40年代の覚書を参照した際、セクシュアリティ概念と繁殖性概念が形成された分脈は異なることが分かる。以下のようなレヴィナスの記述はセクシュアリティ概念と繁殖性概念が「連続している」というよりも「隣り合わせ」であることを示している。

> 私の哲学の本質的要素［…］それは「他者」の重要性である。中心的契機としての「エロス」。
> また他方で、わたしの哲学はj（ユダヤ）のリズムを追う――なぜなら父性を介した寛大な感覚。族長たちとその群れ――子どもたち――預言者たち。（cf.Levinas, 2009, 134, 丸カッコ内は引用者）。

このように「エロス」というセクシュアリティ概念と「父性」や「子ども」といったレヴィナスが後に「父性とは、他者でありながらも、自我である異邦人との関係である。[…]私は、ある意味で、私の子ども「である」」[7]のように繁殖性を記述する際に用いる概念をレヴィナスは区別している。レヴィナスは1942年から『時間と他者』（1948）やTIで提示されているセクシュアリティ概念を記述し[8]、翌年には「私の「エロス」の理論では、中心概念となるのは性である」[9]と述べているが、「父性」、「子ども」概念は1944年に初めて、またそれまで記されてきたエロスとは異なった文脈で論じている[10]。そして、レヴィナスは「性愛」において「父性愛」は無力だとすら記している[11]。このような概念の遍歴と上記の引用文を考慮すると、セクシュアリティ概念は繁殖性概念とは別の水準の概念として、切り離した分脈から読むことが文献学的に可能なのである。事実、レヴィナスはTIのセクシュアリティの現象学の中で「性欲(concupiscence)」（TI, 285）や「愛撫＝ペッティング」には言及するが、「インサーション」、つまり「生殖行為」については一言も語っていない。レヴィナスがエロティックなものは「きわだって曖昧なもの(équivoque)」である[12]と記述する時、彼が記述するセクシュアリティ概念そのものが「男か女か」という二項対立を前提とした生殖規範に還元されない「あいまいさ＝両義性」を秘めているのではないだろうか。

以上のような背景から、本論では「男/女二元論的性差」を本質としないセクシュアルな自己変容の構造をレヴィナスの記述から見出し、レヴィナスが残したセクシュアリティの問題に関する「課題＝痕跡」への一つの応答を提示したい。

確かに、セクシュアリティの現象学で主に取り扱われる体験である「愛撫＝ペッティング」は他者の把持不可能性へ向かうベクトルにおいて記述されており、この現象学をセクシュアルな自己変容論として解釈することは困難なようにみえる。しかし、TIにおいてセクシュアリティの構造は「自己との自我の構造を覆す」（cf.Levinas, 1961, 290）とも記述されており、レヴィナスのセクシュアリティ概念を自己変容概念として解釈することもできる。この点から、レヴィナスのセクシュアリティの現象学を「セクシュアルな自己変容論」としても読み解くことが可能だと考えられる。そこで、本論において軸として解明したいレヴィナスの記述は以下である。

> 官能は主体のカタチを越える (transfigure)［…］。官能における主体は、他者の自己として (これは対象や主題を意味するものではない) みずからを再び見出す［…］。［官能における］主体の困惑は、

主体の支配によっては引き受けられない。そうではなく、ヒロイックで男性的な自我はのちにそのことを「真面目なもの」とは対照的な出来事として想起することになるだろうけれども、[官能における]主体の困惑とは主体が心動かされることであり、女性化（efféminationすることなのである。エロス的な関係のうちには、定位によって生じた主体性の特異な反転、男性的でヒロイックな自我の反転が存在する［…］。(Levinas, 1961, 302-303, 大カッコ内は引用者)

レヴィナスは官能を引き起こすセクシュアルな体験において、「男性的」自我が「女性化」というセクシュアルな自己変容をなすと記述している。

ここで解明すべきなのは次の四点である。1)「男性的」と形容される概念とはいかなるものなのか、2)「官能は主体のカタチを越える」とはどのような出来事なのか、3)「他者の自己」や「女性化」という一般的ではない表現はどのような現象として捉えることができるのか、4)なぜ「男性的な自我」は2)や3)のようなセクシュアルな現象を「真面目なもの」として受け止めないのか、また「真面目なもの」という用語でレヴィナスは何を意味しているのか、この四点である。以下ではこの四点を軸にレヴィナスのセクシュアリティの現象学におけるセクシュアルな自己変容の記述を解明する契機を見出したい。

第二節　男性的存在と決定的なもの＝生物学的 / 性的身体

まず、レヴィナスがセクシュアルな自己変容において前提としている「男性的」存在とは何を意味するのかを明らかにしたい。そうすることで、TIの以前の論文まではセクシュアリティの文脈では言及さなかったこの概念が[13]、唐突にセクシュアリティの現象学の文脈に現れる背景を示し、なぜこの「男性的」存在が反転する現象を記述する必要性にレヴィナスが迫られたのかを明らかにする。

レヴィナスは先の引用文に続いて以下のように「男性的」存在を記述する。

男性的でヒロイックな自我は自己を定位しつつ「ある」という匿名性を停止させ、光を開示する実存のあり方を決定する。［…］その自らを定位させる主体の自由は、責任を含んでいる――これは驚くべきことだろうが、というのも責任という非 - 自由ほど自由と対立するものはないのだから。自由と責任の一致が、自己によって二重になり、自己を通して塞がれた自我を構成している。(TI, 303)

このような自己に自我が繋がれた構造としての「男性的」存在の記述は、明らかにレヴィナスが40年代に行った主体化の記述である。以下では、初期レヴィナスの主体論に遡及して、中期レヴィナスのセクシュアルな自己変容の記述における「男性的」という概念を解明したい。例えば次のような『実存から実存者へ』(1947, 以下EE）の記述をみてみよう。

瞬間の基体化、そこでは主体の支配、主体の力、主体の男性性が世界内における存在として現れ

る、すなわち、志向が光と事物への欲望のうちで［…］主体にとっての自己忘却となる。［けれども］この瞬間の基体化のうちに「ある」の回帰を見出すことができる。基体化は、「ある」に融即しつつ、孤独として、自我の自己への繋縛という決定的なもの (le definitif) として現れる。(EE,142-143, 大カッコ内、下線は引用者)

このように、「男性的」存在とは自己から自我が切り離すことができない閉じた主体化の構造を意味している。では、この自己-自我構造の閉塞性を喚起させる「決定的なもの」という概念は何を意味するのだろうか。初期レヴィナスはこのような主体化の閉じたあり方を論じる文脈でしばしば、この「決定的なもの」という概念を用いており、「男性的」存在を理解する手掛かりとなる。具体的には、以下のようにレヴィナスは「決定的なもの」を「物質的身体性」として捉えている。

このように身体を物質性から理解すること――「自我」と「自己」との間の関係性の具体的な出来事――それは身体をひとつの存在論的な出来事に連れ戻すことだ。［…］

孤独の悲劇を構成している実存の決定的なもの、それは物質性である（Levinas, 1948, 37-38, 下線は引用者）

では、なぜ「物質的身体」が「決定的なもの」と形容されるのだろうか。ここでさらに遡って参照する必要があるのは、「決定的なもの」という概念が最初に用いられた1934年の論文「ヒトラー主義哲学についての若干の考察」である。渡名喜庸哲が論文「『全体性と無限』のビオス」(2014)でTIにおいて数少ない原注で取り上げられているドイツの哲学者、クルト・シリングの人種差別主義的思想を中心に分析しつつ述べるように、レヴィナスにとって「決定的なもの」とはナチスドイツのイデオロギーが依拠していた類や種から決定される「生物学なもの」、つまり「生物学的身体」である。レヴィナスは、おそらく「アーリア人」という概念やユダヤ人差別を念頭に置きつつ、以下のようにヒトラー主義哲学の身体観を記述している。

何ものもその決定的なものという悲劇的な味わいを変えることができないような合一。

［…］生物学的なものが、それが含み持つあらゆる逃れられないことをともなって、精神的な生の単なる「対象」以上のものとなる。生物学的なものが、この精神的な生の核心となるのだ。血という神秘的な声、身体が謎めいた運搬物となるような遺伝や過去への呼びかけ、これらは何よりも自由を有した「自我」が解決する問題として委ねられた問題という性質を失うのである。［･･･］［逆に］「自我」それ自身がこの問題によって構成されているのである。人間の本質はもはや自由のうちにはなく、一種の［身体への］繋縛にある。(Levinas, 1934, 30, 大カッコ内、下線は引用者)

このように、自己-自我構造における「決定的なもの」あるいは「物質的身体」とは「血」や「遺伝」

といった類や種によって決定される「生物学的身体」の問題、言い換えれば「決定論的身体」の問題であると言いえる。

しかし、なぜ後年にレヴィナスはこの「決定的なもの」としての「生物学的身体」を「男性的」という「性」の文脈で記述するのだろうか。

ここで、レヴィナスがTIで「男性的な自我」はセクシュアルな現象を「真面目なもの」ではないとみなすと記述していたことを想起されたい(「ヒロイックで男性的な自我はのちにそのことを「真面目なもの」とは対照的な出来事として想起することになるだろうけれども」)。言い換えれば、「男性的」という概念は「真面目なもの」と関連付けられているのだ。では、この「真面目なもの」とは何なのだろうか。この文脈において、「決定論的身体」の問題、ひいては初期主体論における問題はセクシュアリティの次元と結びつく。というのも、TIまでにレヴィナスがしたためていた小説『エロス』の草稿の中で、この「真面目なもの」が象徴的な役割を果たしているからである。レヴィナスは戦争捕虜収容所の状況を以下のように描いている。

> 髪の毛のもつれを解くための櫛、これは、釘を打つためのハンマーや、パンを一切れ切り取るためのナイフと同様に必要なものであり、さらにストッキングは、足を温めるため、あるいは靴擦れをおこしたり足の皮膚が傷ついたりしないためのものであって、日常生活では医者のような正確さと節度をもって取り扱うべきものだが、こうした有用なものはもはや、道具＝有用物（ustensile）としてもっともな本質を何も持ちはしなかった。これらの有用なものは、もう一つの本質によって貫かれ、覆われ、エロティシズムのカニバリズム的世界へと導かれたのである。それらは、そのもっとも物質的な実質において、もう真面目なもの（sérieux）ではなかった。(Levinas, 2013, 50-51)

以上のように、レヴィナスにとって「真面目なもの」とは「釘を打つためのハンマー」のようなハイデガー的な道具連関の中にある「有用性」を意味する。言い換えれば、「男性的」という概念は「有用性」のイマージュなのである。実際、レヴィナスは『エロス』の中で「男性的世界」を「意味を有した世界」と呼んでいる(Levinas, 2013, 50)。そして、レヴィナスは、30年代後半に書かれたと思われる覚書の中で、「存在と生の根本をなすもの――それは真面目なものである。真面目なものからの逃走――遊び」[14]と明確に彼の存在論批判の鍵概念として用いている。このように「真面目なもの」という概念は、レヴィナス思想に通底する重要な概念なのだ。

レヴィナスはこのような有用性概念をEEではっきりと「戦争」と結び付けている[15]。第二次世界大戦におけるナチスドイツの「アーリア人」という人種隔離差別概念はまさに、ユダヤ人、障害者、性的マイノリティのような、ナチスドイツからすれば「有用ではない」存在を社会的、生命的に抹殺することだった。レヴィナスがヒトラー主義哲学に見出した「決定論的身体」とは「有用性」の名の下に行われた「優性思想」という差別主義を象徴するものなのだ。

対して、レヴィナスはこの優性思想が前提とする「有用性」が崩れ去る現象を「エロティシズムのカニバリズム世界」というセクシュアルな現象の内にみてとっている。なぜレヴィナスはこのようなセクシュ

アルな次元に反有用性の出来事を見て取るのだろうか。一つには、レヴィナスが『時間と他者』(1948)において「性差」というセクシュアルな水準を「多元的なリアリティの可能性そのものを条件付けるもの」とみなしているからだと考えられる[16)]。つまり、レヴィナスはセクシュアリティの水準のうちに一元論的な決定論ではない多元性を見て取っている。それゆえ、決定論的な「生物学的身体」を「性的身体」として翻訳し直すことは、ヒトラー主義の決定論を覆す次元、「エロスのカニバリズム的世界」のような「多元的なリアリティ」の次元を開く可能性を持つのだ。だからこそレヴィナスは、セクシュアリティの構造は「自己との自我の構造を覆す」と、つまり運命づけられた主体性が変容すると記述したのである。このような文脈から、ヒトラー主義哲学における生物学的優性思想に依拠して記述された「決定的なもの」は、「男性的」という「性」の文脈に置き換えられたのである[17)]。

このような「男性的」存在と「同」という「全体性」の関連性、そしてその決定論という全体性を組み替える現象としてのセクシュアリティという文脈から、TIでのレヴィナスは「生物学的身体」の決定論を「性的身体」の内に置き換えることで決定論的な身体とは異なった水準を露にしようとしたのである。

では、決定論的な「男性的」存在が「反転する」、「女性化」とはどのような現象なのだろうか。

第三節　セクシュアルな非決定論的自己変容としての「女性化」

レヴィナスがセクシュアルな自己変容において「男性的」という概念や「女性化」というセクシュアルな概念に訴える必要性は前節で明らかになった。しかし、カッツが留保したように、「女性」という言葉で形容されているように「男/女」という二項対立にレヴィナスのセクシュアリティの現象学はとどまっているのではないだろうか。この問題を本節では、「女性化」という現象を解明しつつ考察したい。決定論的な「男性的」存在が反転する現象としての「女性化」とはどのような構造と意味をもった現象なのだろうか。

端的に言えば、「女性化」、それは形態学的に決定された性的身体の変容であると考えられる。なぜなら、レヴィナスは40年代に「官能――身体の形態――形態以上の［･･･］「形態」」(Levinas, 2009, 54)と、「女性化」が生じる「官能」というセクシュアルな体験を記述しているからだ。種や類から形態学的＝生物学的に決定されている身体（男性的存在）がその決定性から「変容」する現象が「女性化」なのだ。言い換えれば、出生時に医学や生物学から当人の意思とは無関係に決定されてしまっている身体（生物学的＝形態学的な性的身体）が変容する現象が「女性化」なのだ。このような分脈ゆえにセクシュアルな体験における「官能は主体のカタチ（つまり「形態」）を越える（transfigure）」とTIにおいて記述されたのである。ナチズムのような生物学的観点では――性的マイノリティや人種差別のように――外性器や見た目を軸に形態学的に決定されてしまう、言い換えれば身体の決定論的観点が、ある種のセクシュアリティの体験の内で変容するとレヴィナスは述べるのだ。このように、レヴィナスの「女性化」概念はセックス/ジェンダーとしての「女性」ではなく、決定論に反するイマージュとしての「女性」なのである。そして、先に述べたように、この構造はTIにおける主要テーマである「全体性批判」とも絡み合っている。というのも、

決定論的な「男性的」存在とは、有用性に基づいた「アーリア人」のような人種隔離差別概念に、ひいてはその概念を正当化していた「戦争」に飲み込まれている存在だからだ。「女性化」は単に性が移行することではなく、有用性に基づいた全体性という規範とその規範が内在化した身体を変容させる現象なのである。

ところで、セクシュアリティは「可能なことの彼方」(Levinas, 1961, 292) とも呼ばれる。この「彼方」はある面で、「子」(同, 298) という主体の可能性の限界 (「死」) の彼方を意味している。しかし、この「可能なことの彼方」はカッツや伊原木のように「子ども」に限定されることはなく、セクシャルな自己変容にも現れる。なぜなら、生物学的＝形態学的に決定された性的主体が変容するあり方、「トランスジェンダー」と呼ばれるあり方は、自己の権能（＝可能なこと）を越えて予想がつかない対人関係や環境との関わりによって生じる「不確実性」を、決定論ではない体験を伴っているからだ。石井由香理によれば、トランスジェンダーの「自己イメージは、不確実性を含むものになって」おり、彼らの「アクチュアル・アイデンティティは、より自分らしい自己像を追い求めることによってその時々に認識される暫定的なイメージであり、繰り返し問い直され、修正されるもの」だという[18]。

レヴィナスが「他者の自己」と呼ぶセクシュアリティの現象は「わたしはある意味でわたしの子「である」」[19]という意味での父子関係を生むと同時に、未来の不確実な＝決定的ではない主体のセクシュアルな自己変容のイマージュとしても理解できる。

レヴィナスのセクシュアリティの現象学は、父性を介した保守的な生殖論に留まることなく、セクシャルな非決定論的自己変容の体験を記述している。確かに、「男/女」という「概念」には未だとどまっているのではないかとの批判があるだろう。概念的には60年代のレヴィナスの時代性を鑑みた場合その二項概念に留まってしまうのは事実であり、それはレヴィナスが私たちに残した「課題＝痕跡」である。しかし、レヴィナスが記述する性的主体の「基礎」は不確定なもの、第一節で引用したように「きわだって曖昧なもの」である。それゆえ、「男/女」というセックスないしジェンダーではなく性の「曖昧さ＝両義性」から理解される必要がある。レヴィナスの記述には、男/女という二つの性から零れ落ちるジェンダー・クィアのような「男/女」に還元されない現代社会の性のあり様をも含む可能性を持つのだ。

第四節　「曖昧な＝両義的な」治癒としての「愛撫＝ペッティング」

しかし、まだレヴィナスのセクシュアリティの現象学をセクシュアルな自己変容論として解釈する本論の試みに問いは残る。レヴィナスにおいて官能を引き起こすセクシュアルな体験とは、第一節で述べたように、他者の把持不可能性へと向かうものであって自己変容に向かうものではないようにみえる。文献学的にセクシュアルな自己変容論としても解釈できることはすでに示したが、その体験の構造が「主体」を軸としたものであることは提示できていない。しかし、レヴィナスが公的に初めて「愛撫＝ペッティング」を論じたEEにおいては、「愛撫＝ペッティング」は対人関係論ではなく自己が治癒される体験としての自己変容論となっている。本節では、この点からレヴィナスのセクシュアリティの現象学におけるセクシュ

アルな自己変容の記述の臨床的な意義を示したい。

第二節で述べたように、セクシュアリティの文脈で前提とされている主体化とは決定づけられ、閉塞した自己である。そして、それは「現在」という点的に閉じ込められたな時間性において記述される。

> 現在における自己への関係としての同一的な主体はもちろん過去に対しても未来に対しても自由だ。しかし、自分自身には従属している。現在の自由は恩寵のように軽やかではなく、抑圧であり、責任である。この自由は、自己への定められた繋縛のなかで明確化する。つまり、自我は取り返しのつかないほどに自己なのだ。(EE, 150)

EEでレヴィナスはこのように「現在」に閉塞した主体に対して、「経済の時間」と「正義の時間」という二つの時間を提示する。

「経済の時間」は、ある種の未来において現在の苦しみを補完する。当時の近代機械――例えば、列車――のような「道具連関」という有用性のシステムを象徴する装置が現在の労苦をショートカットしつつ未来に向かわせ、未来において現在の苦しみを補填するのだ[20)]。レヴィナスはこの「経済の時間」を以下のように記述している。

> 状況、あるいは労苦としての実存に巻き込まれていることは、現在そのものにおいて回復されるのではなく、抑圧され、埋め合わされ、そして返済される。それが経済活動というものだ (EE, 154)

レヴィナスは「経済の時間」を「現在」の苦しみを無視し、あくまでもその苦しみを「未来」において埋め合わせるものとみなす。そして、このような「経済の時間」は、現在の苦しみをおざなりにする点で問題があるとレヴィナスは批判する。

> 未来は、現在において苦しむ主体に、慰めや償いをもたらすことができるが、現在の苦しみそのものは叫びのように残り、そのこだまは空間の永遠性のうちに永久に響き渡ることになる。(EE, 153-154)

「経済の時間」は、レヴィナスが「生物学的身体」における隔離差別や戦争の内に見て取った現在を未来に従属させる「有用性」と同じ構造をなしている。というのも、隔離差別や戦争は「優性な民族の社会」や「巨大国家の確立」という未来の利益のために現在の苦しみ（ex. アウシュビッツでの苦しみや死）を犠牲にしているからだ。言い換えれば、未来の「有用性」に基づいて決定論的な身体に囚われた主体の苦しみを無かったことにしようとしているのである。それゆえ、レヴィナスは経済の時間に対して「労苦は償いえない。人類の幸福が個人の不幸を正当化しないように、未来の報酬は現在の労苦を汲み尽くせはしない」(EE, 156）と喝破する。このようにレヴィナスがヒトラー主義哲学以来見て取っていた、有用性

に基づいた決定論への批判は、「苦しみ」、「労苦」という情動的、臨床的問題として具体的に理解することができる。

対して、「正義の時間」は現在の「苦しみ」そのものに関わる。言い換えれば有用性に基づいた決定論とは異なった水準を開く。そして、その水準を開く体験をレヴィナスは「愛撫＝ペッティング」と呼ぶのだ。

> 愛撫＝ペッティングは苦しみの瞬間そのものに関係するのであり、苦しみはこのときもはやそれ自己自身には繋ぎとめられず、愛撫＝ペッティングの運動によって「ここではないどこか (ailleurs)」に誘われ、「自己自身」の万力から解放され、「新鮮な空気」を、ある次元と未来とを見出す。(EE, 156)

愛撫＝ペッティングというセクシュアルな体験が、決定論的な閉塞した現在の主体の苦しみを解きほぐすのだ。そして、「ここではないどこか」とレヴィナスが呼ぶ「未来」、「経済の時間」における「未来」とは異なった、決定的ではない未来、決定論的な身体に囚われ閉じた主体からその決定論を崩す自己生成へと主体を誘う。レヴィナスは、40年代後半の覚書の中でこうした現象を「希望」と呼びつつ、以下のように記述する。

> 現在に対するこの希望の具体的な形――愛撫＝ペッティングは多くを語らず、未来において良くなるとも言わない――むしろ愛撫＝ペッティングは、現在そのものにおいて贖うのである。[…] 時間の身体的意義。(Levinas, 2009, 186, 下線は原典)

愛撫＝ペッティングとは現在の苦しみに直接アクセスし、「ここではないどこか」という「未来」を開く「準」ノンバーバルな体験（「多くを語らず」）である。「時間の身体的意義」と、この現象が呼ばれるように、レヴィナスにおいて愛撫＝ペッティングは、生物学的＝決定論的現在に繋ぎ止められることなく、身体がセクシュアルな自己変容として時間化する体験そのものなのである。セクシュアリティにおいて開かれた時間は、戦争のような全体性の時間ではなく主体によって生きられた時間となる。レヴィナスが「女性化」と呼んだセクシュアルな自己変容の現象は、ある種の主体の治癒の現象、臨床的な現象なのである。

ところで、レヴィナスは第2節で参照した「エロティシズムのカニバリズム的世界」を以下のようにも記している。ここから愛撫＝ペッティングというセクシュアルな体験の非決定論的構造が見えてくる。

> エロスティシズムのカニバリズム的世界――というのも、人間の解剖学的構造はすべて、その生物学的な合目的性にかくも見事に適合してはいるものの――エロティシズムにおいて、ほとんど肉屋にとっての動物のような、肉体の重量感へと反転するからだ――手、足、腹部――これらはどれも、身体器官のかくも純粋でかくも　整ったシステムの外部に――そして、足が走れるのに役立ち、筋肉が肉体的努力に役立つといったスポーツの外部に――もう一つの実質を有しているのである。ここで、

> 重量感のある塊の曖昧さ（indistinction）――エレメンタルな皮膚の曖昧さで――のなかですべては食べることであるかのようになるのである。（Levinas, 2013, 51）

基本的には、これまでと同じく、合目的性というシステム、言い換えれば有用性の外部の体験としてセクシュアリティは記述されている。しかし、そのセクシュアリティの記述は、一見すると――例えば、「肉体の重量感」のように――決定論のモデルであった「物質的身体」へと回帰しているようにみえる。しかし、ここでセクシュアリティにおける物質性は「曖昧さ（indistinction）」のなかで記述されており、決定論とは異なった水準の物質性であることが分かる。そしてその曖昧さが「食べること」に帰属させられるのは、EEで「同時に「食べること」の滑稽で悲しいまね事がキスすること、噛みつくことのうちにはある。」（EE, 66）と記述されるように、レヴィナスにとって「食べること＝噛みつき」（所有）と「愛撫＝ペッティング（キス）」（所有不可能性）のうちにあるセクシュアルな「曖昧さ＝両義性」はそのセクシュアリティの現象学の一つの通底したテーマである。だからこそ、レヴィナスは「エロスのカニバリズム的世界」と記し、TIで「愛の両義性」[21]について論じるのである[22]。官能を導く愛撫＝ペッティングが織りなすセクシュアルな体験とはこのような、決定論的な物質性ではなく、「曖昧な＝両義的な」物質性の体験なのだ（物質的身体の「曖昧さ」は理解しづらいものかもしれないが、例えば、身体の性において外性器はホルモンや染色体と必ずしも一致しない。実際、私は、外性器は男性だが、ホルモンは男女を行き来する曖昧な存在である）。だからこそ、あらかじめ決定されたのではない不確定性としての「未来」をこの体験は生じさせるのだ。レヴィナスの記述する愛撫＝ペッティングとは意味と無意味、所有と非所有のような「曖昧さ＝両義的」な[23]、「準」ノンバーバルなセクシュアリティの体験であり、この「曖昧さ＝両義性」において決定論とは異なった時間の水準を開くのである。このような「曖昧さ＝両義性」ゆえに、ナチズムの決定論的優性思想を崩す水準として、レヴィナスはセクシュアリティの水準に訴えたのだ。

レヴィナスのセクシュアリティの現象学は、有用性の下に決定づけられた主体を、セクシュアリティの水準で、愛撫＝ペッティングという「曖昧な＝両義的な」物質的身体の体験の只中で「曖昧な＝両義的な」性的存在へと自己変容させ、「ここではないどこか」という性の水準へと開くセクシュアルな自己変容論でもあるのだ。

おわりに代えて

本論では、レヴィナスのセクシュアリティの現象学がセックスとしての「男/女二元論的性差」を前提としないセクシュアルな自己変容の構造の記述を内包していることが理解された。そしてその記述はヒトラー主義から続くレヴィナスの決定論＝優性思想の乗り越えという課題を含み、その決定論的主体を「曖昧さ＝両義性」を基礎とした愛撫＝ペッティングを介したセクシュアルな自己変容において治癒するという臨床的な記述であることが示された。

ところで、ゲイル・サラモンが『身体を引き受ける――トランスジェンダーと物質性のレトリック』(2010)

で述べるように出生時に決定されてしまう紙面上の性とは、戸籍のように国家が個人を管理統制するための「国有財産としてのセックス」[24]である。まさに、「性」は常に既に決定論の内にあるのだ。私たちのジェンダー・アイデンティティは常に既に国家、法によって閉塞させられている。この点で、レヴィナスの「曖昧さ＝両義性」からなる非決定論的なセクシュアリティの現象学は、現代における性への社会規範を批判し、生きられた性を記述する可能性をもつ。これが、本論が提示する一つのレヴィナスの「課題=痕跡」への応答である。

しかし、レヴィナスの言う決定論的な有用性のシステムではないセクシュアルな自己変容が誘われる「ここではないどこか」と「希望」はどのような性の水準なのだろうか。ヒントとなるのは、「他者、ユートピア、正義」でセクシュアリティの「課題=痕跡」を吐露した晩年のレヴィナスがエルンスト・ブロッホ（1885-1977）の「ユートピア的希望」という概念にも注目していたことである[25]。この希望は、同じくブロッホに注目したホセ・エステバン・ムニョスに従えば、は「失望（disappointment）」に行き着く[26]。なぜならこの希望は現行の社会には「どこにもない場所＝ユートピア（u-topia）」（この社会が「有用」だと認めない場所）を目指すからだ。しかし、この「失望」は現在への批判とまだどこにもない社会性の希求という「変化を想像する行為に必要不可欠なこと」[27]である。そして、興味深いことに、晩年のフーコーもまたこの「ユートピア」を、規範が張り巡らされた世界において――またゲイであるフーコーにとって「生殖」が未来となりえない世界において――位置をもたない「世界のゼロ地点」としての「身体」に見出している[28]。数奇なことに、性の「両義性に引き裂かれていた」晩年のレヴィナスは「ユートピア」という概念においてフーコーと邂逅する。では、レヴィナスが生殖行為に一切結びつけず妄執的に記述したクィアな体験、「愛撫＝ペッティング」というセクシュアルな体験から導き出される「ユートピア的身体」とはどのようなものなのだろうか。このさらなる「語りなおし」の可能性を提起して本論を綴じたい。

以上

【参考文献一覧】

[1] ベンスーサン , ジェラール「両義性と二元性――レヴィナスにおけるエロス的なものについて」（合田正人編『顔とその彼方』知泉書館［2014］より）

[2] De Beauvoir, Simone, *Le deuxième sexe*,1,folio essais,1949 Edelman,Lee,*NO FUTURE*,Duke,2004

[3] フーコー , ミシェル『ユートピア的身体 / ヘテロトピア』佐藤嘉幸訳 , 水声社 , 2013[1966]

[4] 石井由香理『トランスジェンダーと現代社会』明石書店（2018）

[5] 伊原木大祐「E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題」(『基盤教育センター紀要 = Bulletin 23 号』北九州市立大学基盤教育センター［2015］より)

[6] Katz,C.E.,*From Eros to Maternity*(from *Women and Gender in Jewish Philosophy*, Iindiana University Press[2004])

[7]「トランスジェンダーの未来＝ユートピア：生殖規範そして「未来」の否定に抗して」(『現代思想 11 月号：特集反出生主義を考える』青土社 , 2019)

[8] Levinas,*Emmanuel,Quelque réflexions sur la philosophie de l'hitlérisme*[1934]（from *Les Imprévus de l'histoire*[1994]［Livre de Proche,2008]）

[9] 同 *De l'existence à l'existant*［1947］(2004,Paris,Vrin)

[10] 同 *Le temps et l'autre*［1948］(Puf[1983])
[11] 同 *Totalité et infini* [1961]（Livre de Proche,［2012］）
[12] 同 *Difficile liberté*,Albin Michel,1976
[13] 同 *Entre nous Essais sur le penser-à-l'autre,Figures*/Grasset,1991
[14] 同 Levinas,Emmanuel, *Dieu, la mort et le temps*, Livre de Poche, 1993
[15] 同 *Œuvres 1.Carnets de captivité suivi de Écrits sur la captivité et Note philosophiques diverses*,Grasset/Imec,2009
[16] 同 *Œuvres 2.Parole et silence*, Grasset/Imec,2011
[17] 同 *Œuvres3.Eros,littérature et philosophie*, Grasset/Imec,2013, 杉田水脈「「LGBT」支援の度が過ぎる」(『新潮 45 8 月号』[2018])
[18] 渡名喜庸哲「『全体性と無限』におけるビオス―クルト・シリングの注から出発して―」(合田正人編『顔とその彼方』知泉書館［2014］より)
[19] Muños, José Esteban, *Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futurity*, New York University Press, 2009

注

1) 伊原木 , 2015, 16
2) 伊原木 , 2015, 19
3) Katz,2004,193
4) Katz, 2004, 196
5) Katz, 2004, 198-207
6) Katz,2004,207
7) Levinas, 1948, 85-86
8) Levinas, 2009, 66
9) Levinas, 2009, 117
10) Levinas, 2009, 128
11) Levinas, 2009, 171
12) TI, 286
13)「男性的 (viril)」という概念自体は TI のセクシュアリティの現象学以前から何度か用いられているが (ex. EE,142) セクシュアリティの文脈で用いられるのは先の記述が初めてである
14) Levinas, 2009, 53
15) EE, 64-65
16) Levinas, 1948, 77-78
17) 思想史的に言えば、ボーヴォワールの『第二の性』(1948) におけるレヴィナス批判がここに影響されていると思われる。この著作の出版された 1940 年代当事殆ど無名だったレヴィナスを、この著作の脚注において『時間と他者』の記述を長く引用した上で性の文脈でボーヴォワールは批判している (Beuavoir, 1948, 18)。この点に関しては別稿にて詳しく論じたい。
18) 石井 , 2018, 79
19) Levinas, 1948, 86
20) EE, 155
21) TI, 284-286
22) この明らかにフロイトの口腔期的なレヴィナスの記述に関しては別稿にて詳しく論じたい。

23) TI, 285-286
24) サラモン , 2010, 275
25) Levinas, 1993, 107-116
26) Muñoz, 2009, 9
27) ibid
28) フーコー , 1966, 27

Clarifying concepts of self-transformation in Emmanuel Levinas's phenomenology of sexuality

Asahi KONUTA

Abstract:

Emmanuel Levinas (1906–1995) referred to sexuality more often than his contemporaries in the field of phenomenology. In this paper, we aim to clarify the description of sexual self-transformation presented in his main work, Totality and Infinity (1961), with a primary focus on why Levinas so strongly emphasized nonreproductive sexual acts such as petting. In doing so, we highlight the significance of his description of sexual self-transformation from a clinical perspective.

Key Words : Emmanuel Levinas, Sexuality, Petting, Phenomenology, Psychoanalysis